

日本の遊戯史における『戸外遊戯法：一名戸外運動法』 (1885) 出版の意義に関する研究



筑波大学 体育系
助教 李 燦雨

1. はじめに

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を控え、良かれ悪しかれスポーツが注目を浴びている。現在日本で行われているスポーツは、主に日本の伝統社会に起源をもつ「在来スポーツ」と、近代以降西洋から伝来した「欧米伝来スポーツ」に大きく分けられる。その中でも、欧米スポーツが伝来し日本に定着していく過程こそが、日本近代体育・スポーツ史であるといえるほど、欧米スポーツの展開を見ずには日本近現代体育・スポーツ史を語れない。

日本における欧米スポーツの伝来は、主に軍事に伴うもの、外国人居留地からのもの、留学帰国者によるもの、学校教育に伴うものが挙げられるが、この中でもその文化が民衆に浸透しスポーツが日本に根を下ろす役割を果たしたのは学校であった。すなわち、1892(明治5)年「学制」発布以降、近代学校教育の展開と共に、学校は欧米スポーツ摂取する中心的な役割を担い、学校教育によって定着した近代体育・スポーツが今日まで引き継がれている。この学校における教育的・政策的体育・スポーツ展開の拠点となったのが、体操伝習所である。

日本に適した体育法の研究選定や体育教師の育成のため、文部省が1878(明治11)年東京神田に設立した体操伝習所は、主に軽体操(普通体操)の導入・普及に主力する傍らに遊戯・スポーツへの関心も示しており、その中心となったのが体操伝習所の教員であった坪井玄道である。体操伝習所や坪井玄道に関しては、日本体育における歴史的価値から、その教育や蔵書を中心に研究が進められ、その功績が高く評価されている。一方、『新選体操書』(1882)、『新制体操法』(1882)などを著し普通体操の礎を築いたことから日本学校体育の父と呼ばれるほどの坪井の評価に対し、彼が注目した遊戯の価値や『戸外遊戯法』(1885)は十分理解されず、それに対する正当な評価の必要性が指摘されたまま今日に至っている。

そこで、本研究では、体操伝習所旧蔵書に関する大場、木村、阿部、大熊の先駆的な研究や木下を代表とする坪井玄道に対する評価を継承しながら、そこで今後の課題となっていた『戸外遊戯法』の原典特定を試みる。そのため、体操伝習所の図書台帳による4945冊の蔵書のうち、583冊の西洋書の中、遊戯(ゲーム、スポーツ)と分類

された11冊を中心に、先行研究で言及された数冊を加え検討し、戸外遊戯法との関連性を考察する。

2. 坪井玄道と遊戯



図1. 坪井玄道と欧州視察

リーランド博士による軽体操伝習所の訳者として体育界に入った坪井玄道は、体操伝習所教員から東京高等師範学校の体操科主任教授に至るまで、軽体操のみならず遊戯(戸外運動・ゲーム・スポーツ)の体育的価値に注目し、体操と遊戯を併用した教育を目指した。体操伝習所が廃止される直前である1885(明治18)年に出版された『戸外遊戯法』を通して、とりわけ児童の身心は体操と遊戯(戸外運動)によつて的確に養成されると主張し、その信念は軍国主義が強まる東京師範学校や高等師範学校時代においても貫かれ、結果的に欧米のスポーツ・ゲームという戸外遊戯が、学校教育を通して摂取されることとなった。

3. 『戸外遊戯法：一名戸外運動法』(1885)

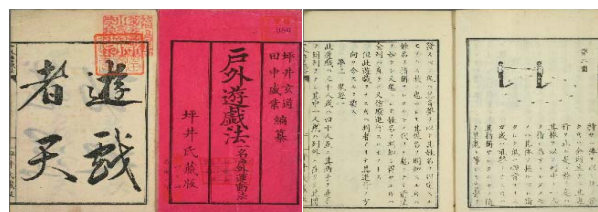


図2. 『戸外遊戯法：一名戸外運動法』

戸外遊戯法が出版される前である1881(明治14)年の小学校教員協同では、小学校低学年において軽体操の代わりに遊戯を課しており、『童女笈』(1876、原典: Girls Own Book) やその抄訳の『女子遊戯法』(1880)、『戸内

遊戯法』(1879、Indoor Amusement)、『体操及戸外遊戯』(1879、Gymnastic: Out of Door Recreations)などが出版されていた。また、大学予備門の英語教師 F. W. Strange による上級学校学生を対象とした『Out Door Games』(1883) やその訳書『西洋戸外運動法』(1885) や『新選小学体育全書』(1884) などが出版されていたことは周知の通りであり、いずれも欧米の遊戯を簡易に翻訳・紹介したものの、内容の実用性や外国人教師の帰国や地域に限定した活動などから、日本体育・スポーツ史においてそれほどの影響はみられなかった。

4. 『戸外遊戯法』と関連西洋遊戯書

戸外遊戯法は、体操伝習所の中心教員であった坪井玄道と伝習所卒業生兼教員の田中盛業が著した児童向けの遊戯指導書で、表2の遊戯が含まれている。

戸外遊戯法は、このように欧米の戸外運動の重要部分を抄訳しながらも、伝習所で教授していた戸外運動のうち日本の習俗に適したもので編成され、近代日本の体育・スポーツ展開の拠点となった体操伝習所併行により全国的に普及し、戸外遊戯法の出版以降、同書に基づいた児童遊戯書が相次ぎ刊行された。

また、表1と2でみるよう「鹿ヤ鹿ヤ」は“Outdoor games”、「ベースボール」は“Manual of physical exercises”もしくは“Beadle’s Dime Baseball Player”、「操櫓術」は“Boat Racing”、「卵帽子」「日月火水」「綱引」「投環」は“Every Boy’s Book”が原典とみられる一方で、遊戯別に多様な西洋遊戯書を参照していることや類似性のない種目も多く見て取れる。これは、戸外遊戯法が欧米スポーツの単純な翻訳書ではなく、欧米スポーツを摂取した日本的著作であることを示唆している。

表 1. 『戸外遊戯法』の関連西洋遊戯書一覧

	著者名	図書名	出版地・年
1	不明	Cassell’s Book of Out-Door Sports and In-Door Amusements	London, Cassell & Co.,1883
2	GRIFFITHS, Thomas,	The Modern Fencer	F, warne & Co. : London & New York, 1868
3	不明	Ball games	London : G. Routledge, 1867
4	Edmund Routledge	Routledge’s handbook of football	London : G. Routledge, 1867
5	Edmund Routledge	Every Boy’s Book	London, 1868
6	Stonehenge and	The handbook of	London : G.

	others	manly exercises	Routledge, 1883
7	F.W.Strange	Outdoor games	Tokio : Z. P. Maruya, 1883
8	不明	Rowing, Sculling and Canoeing	Ward, Lock & Co.: London, 1882
9	H. F. Wilkinson	Modern athletics	London : The Field Office, 1877
10	William Wood	Manual of physical exercises	New York : Harper, 1875
11	William Clarke, et al.	The boy’s own book	London : Crosby Lockwood and Co., 1880
12	Edwin Dampier Brickwood	Boat Racing: The Arts of Rowing and Training	London : Horace Cox, 1876.
13	Henry Chadwick	Beadle’s Dime Baseball Player	New York : Beadle, 1866

表 2. 戸外遊戯法の遊戯と表 1 図書との類似性*

戸外遊戯法	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
鹿ヤ鹿ヤ	△				△		◎				○		
盲目鬼											○		
鬼遊													
卵帽子	△	○			◎								
日月火水	△	○			◎								
投球競争													
旗拾ヒ競争													
旗戻シ競争													
二人三脚競争							×						
囊脚競争													
ホーム攫球)													
綱引	△				◎		×				○		
行進法										○			
投環(クオイツ)	△				◎								
投球(ボールス)	○												
トロコ	△												
フットボール	○	○	○	×		×					×		
循環球(クロッケー)	△	○		×									
ローンテニス	△	△					△						
ベースボール	△	△					×			◎			◎
操櫓術	△				×			○				◎	

* 類似性の高低 : ◎ > ○ > △ > ×